



愛執の文学：讃岐典侍日記の場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大内, 摩耶子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006620

愛 執 の 文 学

— 讚岐典侍日記の場合 —

大 内 摩 耶 子

讚岐典侍日記をはじめ手にしたきっかけは、「兼好が、かつて読んだものならば」という、「坊主憎けりゃ」の逆をゆく至極簡単なファン心理からであったが、読みすすむうちに、その異常な文学であることに、すっかり興味をそそられてしまった。これより後れて中世の頃、同じく典侍として天皇に近侍した⁽²⁾弁内侍や、⁽³⁾中務内侍などの日記、それらは、作者の個性の差はあっても、宮廷内侍の日記というものがあり方に、一つの型のある事を思わしめるものであり、そうした型はまた、こうした地位の人の、日記の当為性をも納得せしめるものであったが、それらに馴れていた目にとって、この讚岐典侍日記は、まこと異なるものとしてうつつたのであった。私日記とは云え、典侍という特殊な公的立場にあるものの日記、しかも、人に読まれる事を期待して書いた日記に、こうした内容のものもあり得たのかと、おそらくは日本文学史上でも、たぐいまれなその内容に、驚異の目を見はったのである。

作者は、歌人藤原顕綱の女、名は長子。堀河天皇の康和二年（一一〇〇）十二月三十日典侍に任ぜられて、讚岐典侍とよばれていた人。この日記執筆の頃、作者は三十才位であったというから、堀河天皇とほぼ同年齢であり、⁽⁶⁾作者は三十才位であったというから、堀河天皇とほぼ同年齢である。八年間を堀河天皇に御仕えた事が、はっきりしている。大体作者二十一・二才の頃から天皇のもとに奉仕をはじめたということになる。天皇の乳母として、この日記にしばしばその名をみせる藤三位（藤原兼子）は、作者の姉であって、この姉妹は、⁽⁸⁾親子ほど年齢がちがっていたという玉井幸助氏の考証にしたがえば、おそらく作者は、乳母子のような地位をもって、そのはじめから有利な立場で宮仕えをはじめ、この地位をもとにして、堀河天皇の思入となり、人も自らもゆるして、天皇の身辺に大きく存在したかのように思われる。

堀河天皇は、元来病弱の生れであり、この日記の記事から推すと、崩御前の二・三年間はことに不豫の日も多かったらしく、したがって嘉承二年（一一〇七）六月二十日の発病も、例の事として、側近も軽視していたらしい。それが七月六日重症と化し、再びたたれることなく、同月十九日崩御となったのである。

日記は上下の巻にわかれ、上巻は、この嘉承二年六月二十日の発病から、同七月十九日の崩御にいたるまでの経過と、それをみとる作者の心境、側近のうごきなどが中心をなしており、下巻は、その後、心ならずも、御子鳥羽天皇の典侍として再出仕した作者の、一年有余にわたる、事毎についての、亡き帝への思出が中心となっている。

2

この日記を通してみると、堀河天皇は、病弱の上、その性格も弱くやさしく、女性的であったが如く、そうした性格のゆえに、父君白河院が院政をとられたのであったか、あるいはまた、父君の院政によって、自身は政治の表面にたつこともなく、無聊のうちに、自らを試練することも、才能を発揮する機もなく、それが内にこもる性格とならしめたのか、そのほどのことはわからない。がともかく、こうした内省的女性的性格が基となり、存在の重要性をみとめられていぬという事への不満の自覚が、一種のコンプレックスとなっていたようであって、このコンプレックスに、重症に伴う肉体的苦痛がむすびついて、平素やさしく、控え目な人には珍しい我儘となって、爆発することもあったようである。この年若い帝の、あわれにも痛ましい闘病の姿、そして終焉となるにいたる姿の一こま一こまが、片時の間も傍を離れず、一喜一憂して近侍する作者の手によって、おおう所なく、まざまざと表現される。

ともすれば病臥がちに、今までをすぐされた帝も、此度は、重患の自覚があった。しかし側近は、さして気にもとめてくれなかった。「など人々は目も見立てぬ」とむつかり、「我ばかりの人の、今日明日死なむとするを、かく目も見立てぬやうあらんや」とも、むつかり給うたことのそこには、帝としての自らが、不当に軽視されている事への

不満平素は、内に秘められても、非常の際に勃発する欲求(不満)をどこかに揺曳せしめて、如何ともなしがたい病の苦しさを駄々児のように訴えておられるのである。自らを空しうして看護する乳母の大式三位に對して、心安だてからとはいえ、「おのれはゆゆしくたゆみたるものかな。我は今日あす死なんずるは知らぬか」と、棘ある言葉をもって、八つ当りに当り給うのも、この不満へのやる方ない憤懣をこめてもってゆきどころのない病苦の絶叫をあげておられるのであろう。不休不眠のみとりに、たまの休息をとろうと、単衣ひきかたく作者からの、その単衣をはねのけて、ねむらせまいとされるのも、苦惱のはての気儘である事は勿論ながら、作者への甘えからもあるのであろう。胸苦しさに困じ果てて、「せめて苦しくおぼゆるままに、かくしてこころみん、やすまりやす」と、神靈の箱を、胸の上に置く姿は、おぼれる者の薬をもつかむ人間性のせつばつまった弱々しさをみせて、それが薬でなく、神器である故に、一入あわれをさそうのであり、いよいよ病更まり、法印から戒を受ける帝の、すでに身の自由を失い、はれのまわったきかぬ手指を以て正装しようとする姿や、「いとよく保つ、いとよく保つ」と声かすかに戒律を契い給うなどのいたいたしい姿の中には、追いつめられた人間の、絶対絶命の悲しさをみせて最後の一刻にみせる凄絶さというものが、みなぎってもいよう。「いみじくも苦しくなるなれ、我は死なんずるなり」と、声かすかに「南無阿弥陀」とすがり、「大神宮助けたまへ」とすがる断末魔をも描いて、そこに、今断たれようとする生命の、はかない最後の抵抗の姿をみせて、生きとし生くるものの、すべてが、最後まで持つてである一縷の希望と、それに代る果てしない絶望との、息づまる瞬間を思わせて、読者の胸に惻惻とせまる何ものかがある。作者は、日々に弱りゆく御身の傍に片時もはなれず侍し、何とかして先年のように、助けまいらせたいと念じ、粥を少し召したとては喜び、「今日しも少し

夜のあけたるこちしておぼゆれ」と聞いては、「うれしき何にかはにたる」と愁眉をひらくときもあつたけれど、加持祈禱も効なくて、ついには顔もむくみ、耳もきこえなくなる容態に、手だてのあろうはずもなく、ただおろおろと苦しみを見守り、なりゆきをみつめるより外しかたがないのであつた。病苦のあえぎが、身近かの人々への八つ当りとなつてあらわれれば、それはそれなりに、心根のいたいたしさが思われて、作者は泣けてくるのであり、苦しきの術なきが、神仏へのすがりとなつてあらわれれば、いたいたしくあわれな姿に感きわまつて、いとど泣けてくるのであつた。

ここにみられる、病魔と闘い、終にはかなくなりたもう若い帝の、なまなましい姿の描写には、一天万乗の君などという格式は、一切とどめられていない。「天皇」の上にもみられがちであつた特殊な超人的な設定、たとえば、人間の種ならぬといひ、あるいは神人というがよくな、全人格的な人間というに類した姿は、一切見られないのである。ここにある帝は、自らを未だ確立し得ぬ力弱い一人間であり、自らの不遇をなげく一人の人であり、死に臨みあえぎ苦しみ弱音を吐き、八つ当りする一人の男性であつて、決して十善の君、一天万乗の君などというにふさわしい姿ではない。宿命を如何ともなし得がたい、そして宿命にうろたえさわぐ一人間の赤裸々な姿の描写なのである。この姿は、作者の好悪の感情によって、いささかも筆を右に左にまげられたものではない。至極の誠意をこめつつ、あるがままに描かれたものであつて、帝を、重患、臨終の姿において書く事それ自体が、すでに異色のものである上に、こうして一人間の姿として、おおうところもなく描き得た事は、まして画期的なことであつた。

さて、そうした病苦にあえぐ帝に対し、その苦しみを自らのものとして、みとりする作者の姿がその間に点出される。看病につくした女

性は、二人の乳母と作者との三人であつたというが、常に傍をはなれず、心こめてのみとりを、一人背負つて立つつもり作者であつてみれば、その至誠の程については、作者自身の自信は勿論、側近の誰もがみとめるところのものであつた。帝も常にこの人を離したからず、これのいう事には従順に、その手からだけは進まぬ食事も取られていゝるし、駄々もこねず、信頼し、病苦にあえぎつつもこれに對しては、やさしい心遣いさえ見せられるのであつた。帝はこれを唯一のたよりどころとし、作者も、至誠を以て奉仕することを生涯の榮譽と思ひ、側近の誰も、帝の作者に對する愛情、信頼と、作者の帝に對する至誠とを、当然のこととみとめ、その上で、看病をまかせ、むしる強要しているようである。

堀河天皇には、十九才年上の中宮（後三条天皇第四皇女篤子。天皇十三才の時、三十二才をもつて入内）があつた。（この外、大納言藤原季実の女、女御茨子があるが、入内後五年にして康和五年、鳥羽天皇を産み薨去され、この頃はすでにおられなかつた）この日記にみるかぎり、年上の中宮との間は、甚だ疎遠であつたがごとく、中宮は内裏を離れて遠くに住み、帝の病が篤くなつても、たまに使を作者のもとによこして、その容態を聞かれる程度であつて、中宮も、帝の心が奈辺にあるかを存知しておられ、作者もまた、中宮との仲らしいのほどを知りつくしているかの如く筆録している。ごくたまに、中宮が参内される事があつても、その対面の時間の、ややつづくのを関白がとがめて、「久しうこそなりぬれ、御粥など、はや参らせんや」と、その帰りをうながしたてている実情であつた。来客（ことにこの場合は中宮である）に對する、関白ともあろうもののこの非礼を通して、読む者はその裏に、天皇中宮夫妻の間に存在する間隔のほどをさとるはずであつて、恐らく、帝にとつて、十九才年上の中宮は、まこと肩のほる存在であつたのであろう。その事実、そして本當に慰められるもの

を、身近く仕える作者に求めておられる事実を、側近の皆人は了知し納得していた事であつたのであろう。帝は作者に對し、唯一の女性として愛情を与え、また求められ、時には甘えもされていたのであり、作者もまた充分これにこたえていた筈であつた。こうした上下の關係は、多々あつた事と思われるが、それにしても、女性の側から、人の読む事を予期した日記に、こうした形で書記された事は珍らしい。

作者は、堀河天皇の発病にはじまり、その臨終、崩御までを、順序を追ひ、落着いた筆付きをもつて、避けられぬ運命に涙しつつも、悲痛に堪えて、冷静に、かつ丹念に書きとどめている。崩御と知つて、「あな悲しや……助けさせ給へ」ただ具しておはしませぬ。……ただ召してぞ」と、帝の冷い手をとらえて泣きおめく乳母の大貳三位や「いかで一所をおきて」と半ば狂乱の藤三位や、また、「声ととのへて、せめておぼゆるままに、御障子をなるとのやうにかはかとはひきならして泣き」あう、めのと子や女房達のありさまを、「あの人たちの思ひ参らせらるらむにも劣らず思ひ参らすと、年ごろは思ひつれど、なほ劣りけるにや、あれらのやうに、声たてられぬは」と自問しつつ冷やかとも思える態度で眺める自らの姿を書きとどめるのである。泣き狂い、果ては悲しみのあまりに失神する姉の姿や、その他の乳母女房達の狂乱とも見える悲痛の表情に比べて、一向にうろたえもせず、泣きもわめかず、却つて、人々の動転の姿を皮肉ともみられる目をもつて、ながめやる作者の、このひやかかな態度は、一体どうした事なのであろうか。作者にとつては、崩御の打撃があまりに大きかつたので、この時果然自失して、全くの痴呆状態であつたがために、人並みの悲痛の感情さえ湧かなかつたのであろうか。しかしそれにしては、多面にわたる細心な觀察がなされており、到底、痴呆状態であつたなどとは考えられない事である。それならば作者の性格が、全く理性一辺であつたという事から来たひやかさなのであろうか。しかしそれにして

は、下巻にみる綿々となつづく思出や、狂的な慕情が理解されない事になる。それなら、成し得るだけの努力をつくしたのだから、もう何ともいたし方のないことという諦観から来たひやかさなのであろうか。しかしそうとすれば、やはり下巻にみる思出の苦痛は生じないはずである。それならば、現在執筆の時点が、崩御をはるかに過去の事実として、眺め得る時に達していたが故に、至極冷静に、崩御の次第を思い出し得て、細叙することが出来たというのであろうか。これは云い得るであらう。しかし所詮は、作者の性格によることであつた。作者は豊かで敏い感情の持主ではあつたが、それは瞬間にはげしくものに応じてゆらいだり、また、そのうごきのままを、あらわに露出してみせるといふような型の人ではなく、表は冷静に、しかし奥深くに多感な思いをじつととどめる性質の人であつた。反応的に感情の高潮を表出する激情の人は、またそのさめることも早からう。しかし作者は、つましやかに、深く思いを秘めて、しかも永く永く内にそれをとどめる型の人であつて、その上滴々の自信家であつた。乳母達のヒステリカルな悲歎ぶりを、ひやかかに眺めて、批判顔に見えたのは、その性格が理性的であることに基づくものではなくて表面の冷静をよそに、内には悲哀の思いを堪えて、奥深くにそれを秘めていたのであり、しかも、自ら一人のみが真実の悲歎を知るものだという強い自信を持って、泣きわめきはては失神するなどの誇大な身振りの人々を、真誠を欠く人々と軽く侮つていたからであらうと思われる。亡き帝に對して、愛と悲しみを、真に持ち得るものは、己れ一人のみという自信のもとに深い思いを秘めて、もろもろの事象を、順序立てて筆録し得たのであると思われる。そう見る時、下巻にみせる永いうらみのほども、奥深くにその思いをひめるその性格から、おのずからに理解出来るところがあることと思ふ。

堀河天皇の崩御により、素服をたまわって、里に下つていた作者は故院（亡き堀河天皇）の忘形見、いまだ五才の幼帝、鳥羽天皇の宮廷に召され、心ならずも二度の宮仕えをするようになる。上巻・下巻ともに、同じく宮廷を背景とするが、上巻は、堀河天皇に侍してそれは憂愁に満ちてはいたが、希望をもって積極的に生き得た日々であったし、下巻は、春秋に富む幼帝に侍し、暖い光につつまれてそこには幾久しい将来が約束されてはいたが、すべては逝つた人への思出にのみつながら消極的後向の日々であった。悲しみは、死別の時より、一人生きて、その人を感じる思出に哀切を極めるし、その思出は、常に帰らぬ人の自らへの愛情の、深く切であった事を、しかも往々にして、倍加した形でよみ帰らしめ、自らをそれへのつながりに於てのみ執心せしめる。思出にのみ生きねばならぬということは、その人にとって、まことに悲惨残酷な運命を決定づける事であつて、下巻にみられる作者の執心の世界は、純情であつたが故に、ぬげだす事の不可能であつた、宿命的な、一つの苦界の巷であつた。

3

作者は、二度の出仕など思いもよらなかつた。再出仕の沙汰を受けて、「見るにあさましく、ひがめかと思ふまで」あきれ、辞退の口実として、尼になろうかと思ひ乱れたともいうし、病にもなれかし、然らば自然と沙汰やみにもとも願つたともいう。しかし、白河院の、たつての懇望と、たのみける人（夫の意か）や、親兄弟などの説得に逢うては、やむなく出仕を決心しなければならなかつた。そこには、作者の個人の意志でないものが働いている。この出発点からは、この出仕は、作者自らにとつても、苦痛の連続を結果しようし、洋々たる前途を祝福されてよい幼帝にとつても、全くふさわしくない後向の姿勢が、

暗示されるのであつて、まこと、出仕後の作者は、幼帝の傍近く侍しながら、魂はるか過去にあくがれ出でて、昔を偲ぶ残骸と化し果つたのであつた。下巻においては、このぬげがらに等しい自らの姿、そして幼帝に対しては徹底したニヒリストとしての自らの姿を、ありのままに描いて、その姿は、また読者の目をそばだたしめるのである。

幼帝の一世一代の即位式に、典侍として列しても、「べちにおもしろくみゆべき事ならねど」人ども見さわぎ、いみじく心に思ひあひたるけしきどもにて見さわげど、ただ我は何事にも目もたたずのみ覚えて」と、作者は新しい感慨を訴えない。この式では、褰帳しんちやうの晴の重職を仰せつけられ、その奉仕をするのであるが、その折にしても、「我身いでもありぬべかりける事のさまかな」と冷やかに思うのであつて、身体だけは、型の通り動いても、心は、ただ昔の思出ばかりに去来するのである。中世の内侍たちの日記がそれぞれ、即位式に侍つては筆を尽して、盛事をたたえ、栄ゆく御代を祝福し、侍る身の幸を思うて、しびれる感激に言葉をつくしているのとは、甚だ趣を異にして、それとは全く対照的に、これは心進まず、周囲の雰囲気にとけこむ事も出来ず、異邦人の如く、一人孤独の中に、悄然と、あるかなきかの姿にて、帰るのであり、「御顔の色がたがひておはしますはいかに」と、その蒼白の顔色を、侍者がとがめたときえのべている。新帝の、洋々たる春秋を寿ぐべき即位式に列して、かくあつた自らの事々を、こつとまびらかに書き得た事は中世の内侍の日記（それはあまりに形式的であるが）のあり方と比較して、常規を逸しているともみられるしそれは、新帝の側からみれば、大きな侮辱でさえもある。この心根はまた、大嘗会に關しても同じ事で、「この事書かずとも思ひやるべし。みな人の知りたる事なれば、細かに書かず」として、省筆しているが、これも、「典侍日記」と銘うつにしては、当然、取りあげるべき誓の行事であり、これが省筆は、やはり形式上からみて、整わぬものであ

るとも見られよう。(これはあくまで内侍日記というものの、形式上からの必要性であって、文学的見地にたつてではない。)或いは、また天仁元年大晦日のこと、幼帝の元旦の祝物の世話を命ぜられるのであるが、それぞれの人の用意する中を作者のみは、祝物をさておき、「わかれやいとどのみ覚えて」と云つて、故院との別れが、一段と遠くなる事にも思い結ばれているわが心をのべて、新帝新春を寿ぐ気配を、全然見せていないのである。その心構えの程が思われよう。幼帝に対しては、「故院の御かたみには、ゆかしく思ひまらさず」といい、「親しく馴れ仕うまつる主とならせ給へば、おぼろげならぬ契にこそ」とは云っているけれど、作者にとつて、幼帝は、故院の忘形見としての、愛情のつながりとはなっていない。あくまでそれは、恋しい人とは異なる個であり一人の小童にすぎぬのである。死との闘に見せた故院の弱い人間性——それは、どこにもここにもある当り前の一人の人間の姿であった——を、暴露し得た筆は、容赦なく、ここでも幼帝を、帝としてでなく、一人の童として書きあらわすのである。

それは、故院のおわしたと何等変らぬたずまいをみせる御所の大雪の朝の事であった。そこに故院がいますかの幻覚に捕えられている作者の耳に、「降れ降れこゆき」と無心の童の声が入る。「こは誰ぞ、誰が子にか」と作者は疑問に思う。そしてハッと我に帰り、そうだった。あれが私の御主人公であったのだと気がつく。そして、なまけなくなつてこの小童を主人として、頼らねばならぬのかと、そのたのもしげなさが思われて、あわれになつてくるのであるとのべている。故院への深い愛着を、どうしても断ちきれぬ作者にとつて、なるほどこの感慨は、その時のいつわらぬ実感であつたらう。そしてそれを粉飾せず、実感のままに表出し得た事は、まことに良いことであつた。しかし、これを表出し得たという事実から、その性格の底に、ねつとりとしていつまでもへばりつくねばつこさと、妥協をゆるさぬ一筋

の強靱さとをみるべく、そして一方実感そのものの中に、故院への厚い思いとは裏腹に、ニヒルとも云うべき非情さがかくされている事も否めないであろう。これはこの文学にみられる一つの特徴であつた。何事も、故院を思出すよすがとして存在すると思われた作者は、こうして、昔の幻覚と現実の風景との混沌の境に、呆然と起居しているようであるが、そうした作者を目ざまして、現実にも引きもどすのは幼帝であつた。新内裏が珍らしくて、女房達は見て歩こうと誘いかける。見るものすべて昔の思出につながる苦しさに同行を断り、孤独に自らを封ずる作者に、「いさいさ、黒戸のみちを、おれら知らぬに、教へよ」とて否応なく引き立てて、幻を破らしめるのは幼帝であつた。また、くらべやに、経を教え下さるうとして示された故院の、数々の愛情を想起して、夢心持の作者に「われ抱きて障子の絵見せよ」とせがんで、現実にも引きもどすのも幼帝であつた。この時せめてもひたる幻の境を、無慚に破られてその悲しみを、「よろずさめぬるこちす」と作者は訴えている。障子の絵を、お見せしてあるくうち、故院の帖られた笛の楽譜のあとを壁に見つけて、思わず落とす涙を、「あくびをせられて、かく目に涙のうきたる」と弁解する作者に「ほ文字り文字のこと思ひ出でたるなめり」と御老成おせに仰せある幼帝には、さすがの作者も、「うつくしくて」(おかわゆく思われて)と評し、「あはれにさめぬるこちしてぞ笑まる」とのべている。五節の前の或日、上の御局で、幼帝に侍して、内匠の造作するのを見ながら、故院のこの折の事々を思つて「つくづくと思ひむすばほれ」ている作者に、「あのうちへくもやりもちたる物こそせて、いでいで、出で行かぬさきにはせよそれ言へ、それ言へ」と性急に注文があつて、作者の恍惚の思いをやぶり、ひきむけさせ(内匠の方に、顔をひきむけしめ)られるのも幼帝であつた。ここでも、「よろづさめぬるこちす」と不満げに、作者は訴えている。

こうして幼帝は、かれんに、無心に、この作者につきまとうておられるけれど、そのほほえましいあどけなき、人なっこさも、一向に作者の心をまぎれさせはしなかった。作者は、現実⁽¹³⁾に幼帝の傍に侍してはいても、その心は幼帝と幼帝をとりまくあらゆる存在とを離れて空々しく、常に故院とともに息づいていたのであった。幼帝に対する作者の評語を取りあげても

胸つぶれてぞおぼゆる

たのもしげなきぞあはれなる

見るぞあはれなる

よろずさめぬるこちす

あはれさめぬるこちしてぞ笑まるる

など、いずれもつき放した表現であって、つめたく第三者として非人情に幼帝をなぐる眼を感じよう。幼帝⁽¹³⁾に対しては、まことニヒルであつたと評しても酷ではあるまい。

こうして現実⁽¹³⁾に背を向けて、過去の幻覚に生きたという自らの姿を諸所に描いてみせたのは、そうあつた姿を示してみせる事によって、自らの心の状態のあつた姿を強調しようとして形成した筆の上におけるフィクションではなく、実際に意識が混乱していた事は事実と覺しくて、所々に筆は乱れて、過去の事実と現実のそれとが、全く混然となつてしまつている文脈をさえ多々生じており、時には読解をもさまたげられる。この混乱は、文才の有無如何の問題であるよりも、作者の、過去に対するせつない、一ずな思いから生じた一種の精神的錯乱によるものであつたろうと思われるのである。

悲しみは、時の経過とともに忘却の中に入る。忘却とは、むすぶれば心に對する、天の与えた最高の治療劑である。人々は、この忘却の恵みによって、故院への思いもうすれ、新帝の新しい時代に、それと

なく準じてゆく。それらの中にあつて、一人作者は、頑固に己れを持し、かたくなに殻を閉ざして、決して開こうとはしないのであつた。

一周忌もすんで、人皆諒闇の服をぬぎずて御所の様子もはなやかにめでたくなつたにつけても、作者一人は執拗にぬぎかえようとはせず、関白から、ぬぎかえる様にとすすめられても「これをさへぬぎかふるこそ。院の御かたみと思ひつれ。これをさへぬぎつればいと心細し、一天の人、御心ざしあるもなきも皆したりつるに、親しくつかうまつりつるさへ一度にぬぎてんずる、思ふによりならぬ事なれど、脱ぎかへまうきこちする」と脱ぎたがらないのである。新内裏に幼帝が遷幸あるにつけても、「參らんとも思はぬに」といい、白河上皇から、御供をするようとの沙汰を受けても、火取水取の童だけを出仕させて、「我は參らじ」と頑張るのであり、上皇の仰せにそむく非を指摘されてはやつと「かばかりの事だに心にまかせぬ事」となげきながら出仕する。そしては、一度決意して去つた御門を、再び入る事に悲痛の涙をしぼるのであり、「御帳のかたびらを見ては、かたしきの袖もぬれまさり、枕の下に釣しつばかり」涙をこぼし、二代の帝に仕える自らの宿逆を思つて、「あはれしのびがたきこち」がされるといふのである。また、夜の更けぬ中に、心安く退出の出来る今の身がありがたいのではなくて、その昔、退出すると申せば、きまつてそれをさせまいとして、色々とばかりごとをめぐらしては、作者を傍にひきつけおき給うた故院のはからいがひたすら偲ばれるのであつた。

時とともに、いささかもうすらぎゆかぬこの人のこの思いは、一人の女の、一人の男に對する、いちずに純粋な、深々とした愛情を思わしめて、まことにうるわしく、痛々しいかぎりではある。しかし、綿々となつづく思出は、時にはあまりにもめそめそとしていて、愚痴っぽいとさえ思われる。死別の悲しみも、思出の苦しみも、時の経過の洗礼をうけてうすらぎゆき、はては、なつかしさをさえ伴うものとなり

もしように、作者の場合は、決してそうはならなかったのである。時の経過につれても、自然とうすらいでもゆかなかった作者の、悲しみ苦しみの連続というものは、故院に対する愛情が、あまりにも個に執しすぎて狭く固かったがために、死別の悲痛を契機として、その個愛が大きな愛情へと育ち展開してゆくのをさまざまたところにあつたのではなかつたか。故院に対する個愛が、死別の悲しみの中にとどまり、その形のままに凝り固まつただけであつたことが、自らを悲しみ苦しめつけていたのであろうと思われる。この場合、故院に対する個愛が、死別という最高の悲哀を通して、それをのりこえ育つて、大きな社会愛となるが如き飛躍的な理想を期待する事は出来ないにしても、少くとも幼帝——それは、思うた人に比しては、あまりにもたのもしげない幼き童であつたが、思うた人の遺児であり、そうでなくとも無心に言動するいたいけな幼児であつてみれば——に対しては、自らに、それに対する人間として、特に母性愛的な愛情が芽生えても来、その愛情がだんだんに大きく育つてゆくという愛の高貴性が生れて来てよかつたのではなからうか。作者の場合、それさえが生れて来なかつたところの個愛に止まつた所に、綿々とつづく苦痛が存在したのであつたかと思われる。

この日記にみるかぎり、作者の愛情は、少くとも幼帝への母性愛となつて発展する事さえしない愛情であつた。個の愛に執して、他に目を転じて施すというすべもしらず、深く強く、己れにのみとどまつて結局するところ自らを苦しめるに止まつたのは、广大無辺である筈の愛情ではなく、それは一つの執念であり、愛執ともよぶべき、人間の一つの業(ごう)でもあつた。故院に対するこの愛執から、解きほぐされてよい契機、即ち、個愛から悲哀を通し、広い愛へと進むべき契機を、手近かに幼帝への愛育として与えられながら、それをつかみ得ず、切角ひらかれた救いの手綱を我がものとなし得ずして、愛執から終に脱

却出来なかつた。作者の愛執は、天与の救いの道を自らとぎしてしまつたのである。

4

作者の愛執の強きは、一にその性格にあつた。再出仕にからんで、出渡る心境の中に、また、諒闇がすぎても喪服をぬぐうとせず、傍をてこずらせる中にも、或は、新帝の内裏遷幸に「参らぬ」と申してしつこく駄々をこねる中にも、素直でなく、片意地で、執念深い性質がうかがわれるのであるが、そうした性格が、愛情にまつわる時、愛情は一点に凝り固まつて、愛の本来具有している筈の一面を失つて、深くはなるが広さを失ひ、いびつものとなり終るであらう。

愛に執したことは、作者の生来の性格に原因するものだと言えながお一つ、過去の自らのあり方に対する反省が、またそれに追いつちをかけたものかと思われる。瀕死の重症の中にあつて故院は、なおかつ作者に、深い思いやりをみせた、やさしい性格の人であつた。作者は、その愛の大きさを、故院生前は、さまざま身にしみて覚えなかつたのであらう。死別してからしみみとさとするその愛の大きさ、そしては、恩愛に狎れていた自らのおごりや甘えなどが、はじめ反省されて、胸に痛みを覚えたのである。時を経て、いとど増すこの胸のうずきが、数々の思出をたどらせ、そのあれこれに足をとどめしめて、過去の愛に膠着せしめ、執着せしめたのではなかつたか。他者の愛の大きくあつた事に比して、報いるに自らの、如何に驕慢であつたかと思ひ知られて、それへの反省が、思出に執せしめ、その愛に執せしめたのであつて、この愛執が一つの自虐となつて自らを苦しめる事になつたのである。こうした自虐の中にあつては、よほどの精神的飛躍がなされぬかぎり、ぬけだす手だてではなく、ただただ後向の姿勢となり、

現実に対しては、そっぽをむく態度となって現われる。

嘉永元年夏のこと、扇引きが行われた折、まず汝から引けとの故院の仰せに、作者がまっさきに引いたところ、「うつくしと見しを、え引きあてで、中にわろかりしを引きあて」たので、面白くなく、扇を故院の前に放りだしておいた。さすがの故院もそれを見て、「かかるとやうである」(こんな無作法な仕方であるものか)と苦笑されたし、事の次第を聞いた女房達は、「家の子の心なるや、こと人はえせじ」(愛寵者だから出来たこと、他人にはとても出来ぬ事だ)とて、ほとほとあきれ果てたという。このことを作者は記したあと、なおこの事実を反省して、「そのをりは何ともおぼえざりし事さへ、いかでさほどめてゐる。故院の御厚情に対する、自らの所業、その折は別に何とも気にとめぬところのものであったが、今一度、思出の中に取り出してみると、それは、恩寵に狎れて犯した非礼であり、人のあきれられるほどの我儘であったことが、ひとと自覚されたのであり、この自覚と反省がますます愛に執せしめ、そこに自らをしばりつけて離さず、それが自虐の鞭となつて、進みも退きも出来ず自らをさいなみつつけることになるのであった。

扇引きの条にみられるこのような自覚と反省の言葉は、この他所々に発見出来るところであるが、こうした反省が、しつこく自らをしばり、かさねて過去の故院の愛情を追わしめたのであった。故院の愛情の数々の思出、それに対する自らの所為への反省が二重の力となつて、追想へと強力に駆りたてたのであつて、この場合他を省る余裕のあるうはずはなく、ただ一つの事に執したのであると思われ、幼く、あどけない鳥羽天皇の、あの人なつこさにも心なごむことを不可能ならしめて、愛情のまことの姿への発展を阻止したのであつた。幼帝に対してニヒルなとまで感ぜられる作者の所作も、作者の故院に対する愛の執

念が強かつたせいであり、加えるに故院の愛情に値し得なかつた自らの過去の姿への反省が、力強く作用してゐるであらう。現実を、真正面から素直に見ようとする関心すら示さず至つてニヒルに、そして過去に一切の熱情をそいでそれに執した作者の生き方、そこには、息苦しいばかりの悩みが充満して、いささかの救いもない。愛とは悲しいものである。愛とは自己をなげすめるべきであり、執すべきものではない。ものをはぐくむ事を、その本能として持つはずの作者であるからは、あくまで自己中心に、与えられたものとしての愛の周辺にのみ執するのでなくて、幼帝を契機として、与える愛、愛育へと進展してゆくべきではなかつたらうか。その上、望むべくば、この正しい愛の開眼のもとに、さらにもっと広い愛情——例えば社会愛とでもいうべきものへと進展してはしいものであつた。いな、それらはのぞめなくとも、最少限、せめて作者の愛執が、幼帝のいたいけな姿にだんだんとほぐれてゆき、愛育に再生の力を見出しかけているとでもいう姿勢だけでもみせていくれたらと願うのであるが、この日記にみるかぎりでは、最後まで愛執の境にとどまつて一步も進まず、平安の一日もなくて苦惱の中に巻を閉じてゐる。作者の愛情の純真さその深刻さには心打たれるけれど、狭きにとどまつた事は、人間的な感動をよび起さしめないところである。

この日記執筆の時期は、日記最後の日付の天仁元年(一一〇八)十一月晦日を経ること数カ月、年あけての同二年の五月、「さらぬだに物むつかし」く心結ばれるさみだれの降る頃のことだという。のどかな里居に、いとど昔を恋うやまれぬ心から、「心なぐさむや」と筆をとつたと作者はいつてゐるが、これは、崩御後約二年に近いこの折にして、未だおとろえることなく、やる方ない作者の愛執の苦惱が、唯一筋に、綿々となつてゐることを示している。「鳥羽帝に奉仕する事、十余年にして宮を退いたが、厚い御親任を受けて、退宮の後も時

々天機を奉伺していた様である」と述べられる玉井幸助氏の言が事実であるならば、その後、時の経過は、忘却が作者の心を愛執の桎梏からときほぐして、心平らかな日々の訪れがあった事になるのである。しかし、源師時の長秋記に伝える様に、讃岐典侍は、精神的発作を起こして、故院の霊がのり移ったと云って、種々予言をしたということが事実であったとすれば、人並み外れてあまりにも深く、しかも綿々とながくつづいたあの愛執の姿というものは、やはり普通のものではなく、全く異常なものであって、生来の精神病的素質に根ざす特殊格のもたらしたものであったことを示すものといふべく、そうみるとき、何となくすべてが了解されるものがあるような気がする。

この異常性格からは、玉井氏のとかれるように、至極平静な中に、日々是好日の余生を送ったろうとは到底考えられず、いつまでも綿々としてつく思いの中に永いうらみを残したであろう事が想定され、人の世のあわれさ、人間の業の深さがつくづくと思われるのである。

重ねていう。この日記にみられるものは、一人の女性の、一人の男性に対する、一ずな恋心の表現であった。諸書に説く如く、姉が弟に見せるような親愛の情の表現でもなければ、乳母がその養君にみせる母性愛的な愛情の表現でもない。対天皇のねばりこい愛情表現の文学であるところに、この文学の特異性があるのであり、上下巻にそれぞれ親子の帝を点出して、その親と子に対する作者の愛の対比を見せるといふ巧みな構成のもとに、上巻は、天皇の臨終を描いて、人間性豊かな、深い写実性は貴ぶべく、下巻は、幼帝の可憐さにもなごみゆかぬ作者の愛執の姿を露呈して、その豊かな自照性は高く評価さるべく、その筆付きには、至らぬところや、文脈の混乱があらうとも、体験を描いて、人間の「愛と苦しみ」「愛の悲しさ」の実体を見せ、総じて人間のことなみのはかなさ、人間の不可解さというものをまざまざと示すものであり、まことに香り高い文学といわれねばならないであろう。

死をといて、これも個にとどまり、生あるものの一般の必然の運命として、これを深く見極めようとしなかったという今一つの欠点を、ここにつくことはやめよう。

注

- (1) 徒然草一八一段に
ふれふれこゆき、たんばのこゆきといふ事、米つき篩ひたるに似たれば、粉雪といふ。「たまれ粉雪といふべきを、あやまりて、たんばのといふなり。垣や木の股にとうたふべしと、ある物しり申しき。昔よりいひける事にや。鳥羽院幼くおはしまして、雪の降るにかく仰せられけるよし、讃岐の典侍が日記に書きたり。
- (2) 大阪府立大学紀要(人文社会科学)十二巻拙稿参照
- (3) 大阪府立大学紀要(人文社会科学)十一巻拙稿参照
- (4) うちみん人、女房の身にあまり物しりがほに憎しなどぞそしりあはんずらむ……もどくべからず。
などとあって、読者を予定していることがわかる。
- (5) 玉井幸助氏著、讃岐典侍日記通釈に記載された「讃岐典侍日記作者考」による。
- (6) 右「讃岐典侍日記通釈」に於て、玉井氏は、「諸般の資料を以て考証した結果、此の日記を書いたのは、三十才前後の事と推定する」(同書四頁)とのべておられる。日記執筆は、堀河天皇崩御嘉承二年の翌々年の天仁二年五月の事である事は、日記の序文でわかるのでこの時三十才とすれば、天皇崩御の年は二十八、九才であり、大略天皇と同輩の若となる。
- (7) 日記の序文に、「もろともに八年の春秋つかうまつりし……」とある。
- (8) 玉井氏の「讃岐典侍日記作者考」二〇八頁

(9) 玉井氏の「讃岐典侍日記作者考」二〇八頁

(10) 日記の諸所に散見する左のような文から、

○されば去年をとしの御事にもさる沙汰はさぶらひしかど

○をととしの御心ちのやうにあつかひやめ参らせたらん何心ちしなんとぞ覚ゆる。

○かやうにて一とせのやうにやませ給へかし

○いかにも此の二、三年例さまに覚ゆる事のあらばこそ行幸もあらめ近きほどだにもなし

(11) 内は例さまにもおぼしめされざりし御けしき、ともすればうちふしがちに、これを人はなやむとはいふ。など人々は目もたてぬ……

(12) 日記をひもとけば、随所に於てそれが見られる。殊に下巻、作者の思出の中に出て来る影像是、完全に作者にひきまわされていて、弱い性格の程が顕著にうかがえる。

(13) 御神樂の夜を細叙した章段だけは、そうではない。そこでは形式的な祝賀の気配に満ちており、万事をめでたく祝い納め、例えば幼君については、

我が君のかくいはいけなき御よはひに世をたもたせ給ふ、伊勢の御神も守りはぐくみ奉らせ給ふらむと、位もたせ給はん年の数ぞ、たとへば長井の浦のはるばると浜の真砂のかずもつきぬべく、みもすそ川の流いよいよ久しく位の山の年へさせ給はん、まことに白玉椿八千代に千代をそふる春秋まで、四方の海の浪の音静に見えたり。

とのべて、至極尋常にその将来を祝福しており、その他閑白に対しても

殿の御琴の音、つまおとなべてならずめでたし。みなみな人々緑肩にかけてたつに、殿は人には今ひとときはまさし参らせて、御したかさね、うち御ぞ、肩にいたさせ給ひたるを見まらすれば、三笠の山にさしいづる望月の世々を経てすみのぼらんやうに見ゆ。御年のほどなど誠に盛なる桜の花の咲きとのほりたらむを見ることちす。御よそほひ、天りんしやうわうかくやとおぼえさせ給ふ

と言葉をつくして追従していて、回想のことはに満ちて悲愴の気分深く、幼帝に対して至極冷やかな他の章段とは甚だしく趣を異にしており、全般に亘り、浮々として心満ちた気分が横溢している。文体からみても、他の部分に例をみぬ修辞法をやたらと用いていて、異なる感が持たれるし、不可解なものを覚える。或いはこの章段だけは作者ならぬ他の手によりなつたものを取込んだものかもしれない。よく考えてみたいと思つてゐる。

(14) 長秋記(源師時の記録)元永二年八月廿三日の条に(史料大成6 一五八頁)

伊興守語云、候内裏故讃岐前司頭綱姫、宇讀較此間稱先朝御靈院 堀川奏種カ 雑事、己及大事、仍召彼先和泉前司道經、邪氣間暫不可令参内之由、被召仰云々、……とある。

なお元永二年は鳥羽天皇即位から十三年目である。この年まで讃岐典侍が奉仕していた事もこれで判明する。

(15) 日本文学史(久松潜一編、至文堂発行)の中古篇に

極端な云ひ方をするならば、姉が弟をみとつてゐる時のやうな、親しいしかも真剣な心痛が祈りをささげるやうな切実さを伴つて流れてゐることを認めざるを得ない。さういふまるで肉親のやうな感情の通い方といふものは……とある。

(16) 平安朝の生活と文学(池田龜鑑)(二八頁)に

また天皇の御乳母は、その出生の門地にかかはらず、典侍に補せられるのが通例でした。讃岐典侍日記の著者などはその一例ですとある。これによれば著者は、作者讃岐典侍を、堀川天皇の乳母とみておられる事になり、日記にみる愛情は、乳母の養母に対する母性愛的なものと考えておられたと判定して差支えなからう。